

はじめに

本報告書は、金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」の平成22年度における取り組みの一環として、平成22年7月24日に連携先の一つである金沢市の泉鏡花記念館並びに金沢能楽美術館と共同で開催した、「仕舞と対談「鏡花と能楽～名作『歌行燈』を中心に～」」（会場は金沢能楽美術館）の報告書である。連携先の金沢市とは、本報告書第1集『シンポジウム：金沢が育んだ加賀宝生の魅力ー無形文化遺産の継承を考えるー』に概観したとおり本事業の開始前から、そして開始後も、金沢能楽美術館を拠点にさまざまな形での連携を模索し、実現して来ている。



今回は、平成21年度の泉鏡花記念館文学講座第2回（8月25日）で西村が「泉鏡花と能楽ー『照葉狂言』以前の金沢能楽史から照らすー」という講演を担当したことを契機に、同館学芸員穴倉玉日氏の発案により、『歌行燈』の成立100年を記念して「鏡花と能楽」をテーマに、金沢能楽美術館と共同で展示や関連行事を行う企画を、同年9月24日に金沢能楽美術館学芸員の山内麻衣子氏を交えて3者で、具体的

に検討したのが始まりであった。その後、泉鏡花記念館・青山克彌、金沢能楽美術館・藤島秀隆、両館長の指導のもとに、展示内容に関する両館の打ち合わせが平成21年度内に2度開催され、金沢能楽美術館館長補佐・中村誠氏を中心に企画の細部を詰める作業が進行した。やがて関連行事の一つ、「仕舞と対談」に本プロジェクトから西村が能楽研究者として参加し、鏡花研究者である昭和女子大学教授・吉田昌志氏と対談を行うことが決まり、本報告書の編集・発行の実務と経費を負担することを主体に、本プロジェクトが共同開催に名前を連ねる方針も固まった。

両館の共同企画展の展示内容は、それぞれ来館者用のガイドペーパーに概要が記載されている。期間を前期と後期に分けて、前期を『歌行燈』と〈海人〉、後期を『卵塔場の天女』と〈羽衣〉を核としつつ、「鏡花と能楽」の関係を知る上で示唆に富む重要な資料を数多く集めてあり、それら貴重な資料と知見を御提供くださった所蔵者各位の御厚意と、その探索・展示に努力を傾注された両館の見識に深い敬意を表する次第である。「仕舞と対談」や本報告書掲載の諸論考に何らかの収穫が散見するようなら、そういう充実した展示を構想したり、展示品を実際に見て触発されたりして、各執筆者の考察が深まった結果である場合も少なくないと思われる。

私個人に限って言えば、「鏡花と能楽」の「能楽」の側から、『歌行燈』の研究に資する発言を心掛ける役割はもちろん自覚しながら、しかし『歌行燈』の研究を知ること、その前にまず『歌行燈』を最後まで読み通して全体を頭に入れなければならなかったし、期待される「能楽」の知

識や見解にしても、『歌行燈』成立の背景をなす明治の能楽事情ばかりでなく、作品に取り込まれた〈海人〉にも研究上の問題が種々見いだされ、近代能楽史と中世文学の二つの方向に、準備の時間が分散しがちとなった。『歌行燈』という作品の大きさ、深さが読み手に要求する水準を、ようやくここに至って思い知らされた。そして近づきたい「名作」は、次第に私の役割を忘れさせ、『歌行燈』自体の研究上の問題にも、初心者の私を誘い込む魅力を見せ始めた。配布資料にメモ風の問題提起を列記して、対談では発言を割愛した部分が所々に混じるのは、資料作りの間に関心が拡大して整理が行き届かなかったことの表れといえる。

一方、対談相手の吉田氏を初めとする「鏡花」研究者による「能楽」への接近に目を転ずると、登場人物のモデル論を中心に当時の能楽雑誌を精査した実証的研究が積み重ねられ、早々と着実に成果が挙がり、共有されていることに驚かされる。たとえば私とほぼ同年齢の吉田氏が雑誌『能楽画報』掲載の松本金太郎談話（『歌行燈』発表の前月）に着目して「「歌行燈」覚書——宗山のことなど——」（『学苑』649）を発表したのは平成6年であったが、能楽研究者が「近代」を対象とする趨勢は、同年に刊行が始まる倉田喜弘氏の『明治の能楽（一）～（四）』及び『大正の能楽』（共に日本芸術文化振興会発行）を待って、それ以後本格化に赴くのであり、倉田氏の集成した新聞記事や『能楽』『能楽画報』などの雑誌記事を参照して、私が「金沢能楽会の百年」（『金沢能楽会百年の歩み』下）を書くのは、吉田氏論文の7年後のことである。その経験から新聞・雑誌掲載の能楽記事を拾い集める困難さが実感できるだけに、鏡花研究者による近代能楽史研究の伝統とその豊かな実りを知って驚嘆すると共に、「鏡花」からの刺激を「能楽」にどう活用するか、研究の今後を夢想することにもつい時間を費やした。

と同時に、「能楽」の側から「鏡花」の側へ、『歌行燈』の研究に資する発言を行う余地はすでないのかも知れない、という不安に襲われたのも事実である。事前の吉田氏の注文には、「近代」を越えて能楽史の根本を問う、すぐには答えられない問題も含まれていたし、なるべく説得力のある新事実の提供をめざしはしたが、『歌行燈』研究史との照合を十全になし得る基盤はもとよらない。その点検と評価は鏡花研究者にゆだねることとし、逆に「鏡花」の側に対して、『歌行燈』の読み方をめぐり、たとえば雪叟の年齢が「やがて七十なるべし」と「七十八歳の翁」とで矛盾はないのか、また『歌行燈』の引用を論ずるのに〈海人〉の詞章を日本古典文学大系本と比べてよいのか、などという素朴な疑問を投げ掛け、吉田氏、穴倉・山内両氏との4者間で確認や調整を行い、情報を補強して、「鏡花」の現在に近い水準に引き上げてもらっている、という安心感に助けられもした。配布資料にも記載できなかった細々とした問い掛けや提案は、本報告書掲載の論考の中で再考するつもりでいる。

さて7月24日当日は、「仕舞と対談」の仕舞の部で、宝生流シテ方の松田若子氏、同じく渡邊茂人氏に〈海人〉玉の段を演じていただいた。両氏の演技には、「鏡花と能楽」のイベントの始まりを告げて、会場の雰囲気を一変させる説得力があった。そうした臨場感の本報告書に再現し得ないものの、だれより来場された90人余りの方々が、実感され、納得されたはずである。その印象を思い出すさすがにと、短いインタビューを試み、写真と共に掲載した。お許しくださった両氏に感謝申し上げる。

対談の部は、難解な名作『歌行燈』の理解がこれを機に少しでも深まるよう、登場人物ごとにそのモデルの家系や背景となった出来事との関わりで能楽史をたどり、鏡花作品の中に位置づける、という方向を念頭に穴倉氏の司会で進行した。インタビューも併せて、発言した事柄は録音に基づき、重複の多い冗長な表現を刈り込み、要約に置き換えたり、補訂を加えたりした部分を含むが、専ら私の駄弁のせいで吉田氏の発言時間を奪い、穴倉氏に心配をかけたことは申し訳なく、用意した材料を使い切れなかった心残りもある。それでも、吉田氏には先端の研究を踏まえた的確な知見の数々を披瀝していただいたし、穴倉氏の事前の進行案と当日の巧みな司会に先導されて、どうにか「鏡花」と「能楽」の二つの世界に架橋できたといえるなら幸いである。

末筆ながら、猛暑の中、時間を割いて熱心に御聴講くださった県内外の鏡花ファン、能楽愛好者、それぞれの研究者、円滑な会場運営に館を挙げて御尽力いただいた泉鏡花記念館並びに金沢能楽美術館の両館、宣伝と記録、報告書の作成等、何かに付け御助力を仰ぐ本プロジェクトの関係者各位に、皆様のお顔やお名前を思い浮かべつつ、本欄を借りてお礼を申し上げる。

(西村 聡)